

第3回 日本漢字能力検定 試験問題

氏名

準1級

解答は、現代仮名遣いによるものとする。

解答は別紙(答案用紙)に書くこと。

(一) 次の傍線部分の読みをひらがなで記せ。(30)
1〜20は音読み、21〜30は訓読みである。
1×30

(二) 次の傍線部分は常用漢字である。
その表外の読みをひらがなで記せ。

(10)

1×10

(五) 次の傍線部分のカタカナを漢字で記せ。(40)
2×20

- 1 翠雨に煙る遠近の山を飽かず眺める。
- 2 例年より禾穂の成熟が遅れている。
- 3 屢次に及ぶ災害が村を荒廃させた。
- 4 門下生から俊彦が輩出した。
- 5 廊下に哀咽の声が洩れてくる。
- 6 后妃に淑徳有りて胤嗣に賢聖の君有り。
- 7 這裏の消息は容易に会得できた。
- 8 館の周りに鹿砦を巡らしてある。
- 9 貴君の萱堂に宜しくお伝え願いたい。
- 10 侃侃たる議論が満堂を圧倒した。
- 11 この度は伯父の緩頰を煩わした。
- 12 生年の丙寅に因んで命名された。
- 13 兜率天内院は弥勒菩薩の住処とされる。
- 14 君主の幸姫として殊の外時めいていた。
- 15 前行戟盾を持し後行弓弩を持す。
- 16 家鴨飛翔すること能わず。
- 17 碩鼠碩鼠我が黍を食む無かれ。
- 18 能わずんば我が跨下より出でよ。
- 19 衆人は或或たり、好悪意に積む。
- 20 参商の隔てを如何ともし難い。
- 21 山の谿に開けた温泉郷に逗留する。
- 22 年を経た亭亭たる相が立ち並ぶ。
- 23 疲れが澱のように溜まっている。
- 24 どんな苦勞も厭ったりしない。
- 25 群臣より賢を擢きて用う。
- 26 信じ難いほど灼かな薬効があった。
- 27 ここに古の帝堯を稽う。
- 28 先父母の遺体を以て殆うきを行わず。
- 29 浅葱にて殿上に帰り給う。
- 30 韓衣たつ田の山はもみじそめたり。

- 1 百歳を迎えた祖母を寿ぐ。
- 2 身の程を弁え賢しく身を処する。
- 3 政界にはびこる賄賂の実態を糾す。
- 4 反省の色無く剩え薄笑いまで浮かべる。
- 5 話し合いの緒を見出し得ない。
- 6 旧習に泥んで改革に背を向ける。
- 7 二つ返事で肯った。
- 8 細々とした庶の事務を扱う。
- 9 故人の徳を称えて一文を寄せる。
- 10 畏くも直々にお言葉を賜った。

(三) 次の熟語の読み(音読み)と、その語義にふさわしい訓読みを送りがなに注意してひらがなで記せ。(10)
1×10

〈例〉健勝……勝れる→けんしょうすぐ

- | | |
|--------|--------|
| ア 1 坦夷 | 2 夷らか |
| イ 3 亘古 | 4 亘る |
| ウ 5 渥恩 | 6 渥い |
| エ 7 嘉禎 | 8 禎い |
| オ 9 鍾愛 | 10 鍾める |
- (四) 次の各組の二文の()には共通する漢字が入る。その読みを後の□から選び、常用漢字(一字)で記せ。(10)
2×5

- | | |
|---|------------------------------------|
| 1 | 全国各地の花(1)に接する。
忽ち強烈な魚(1)があった。 |
| 2 | (2)力を尽くして戦う。
罪、万(2)に値する。 |
| 3 | 適(3)するところを知らない。
数多くの事実から(3)納する。 |
| 4 | 社員の仕事を差(4)する。
ご(4)意頂き感謝に堪えません。 |
| 5 | 忘じ難き(5)旧と再会する。
驚く程世(5)に長けている。 |
- き・こ・し・じょう
しん・そう・はい・べつ

- 1 会場はリッスイの余地もなかった。
- 2 ウルウドシの二月二十九日に生まれた。
- 3 放置すると足指がエシしかねない。
- 4 当代随一の名妓とケンデンされる。
- 5 諫言が社長のゲキリンに触れた。
- 6 選挙前はハウマツ候補扱いされた。
- 7 動もすれば日常のサジにかかずらう。
- 8 ヤブヘビになるから止めておけ。
- 9 シリスボまりの花瓶に菊を活ける。
- 10 玄関に柄の長いクツペラを置いてある。
- 11 草深いハニユウの宿に生い育った。
- 12 沖合に漁り火がテンテイする。
- 13 食事をするのもオックウだった。
- 14 頭部を殴打されてコントウした。
- 15 ツラツラ考えてみると話がうますぎる。
- 16 古式に則りカンブツエを行う。
- 17 ホラが峠を極め込んでいる。
- 18 どうせ例のホラに決まっている。
- 19 夜は早くもシヨコウを過ぎていた。
- 20 漸く解決のシヨコウが見え始めた。

氏名

準1級

解答欄を間違えないよう設問番号を確認してください。

(六) 次の各文にまちがって使われている同じ音訓の漢字が一字ある。上に誤字を、下に正しい漢字を記せ。

(10)
2×5

- 1 著者の穎敏且つ細利な頭脳は東洋文明の実態を的確克明に把捉している。
- 2 古雅な装束を纏い翁に紛した能楽師の舞う所作から幽玄の気が立ち昇る。
- 3 断末魔の苦問に顔を歪める戦友の手を握ると安堵と感謝の色を浮かべた。
- 4 煩忙を逃れ浩然の気を養わんと秋の信濃路に佳境賞地を求める旅に出た。
- 5 泰西思潮紹介の啓蒙的著作が広湖の喝采を博し一躍時代の寵児となった。
- (七) 次の問1と問2の四字熟語について答えよ。

(30)

問1

次の四字熟語の(1～10)に入る適切な語を後の□から選び漢字二字で記せ。

(20)
2×10

- | | |
|--------|--------|
| (1) 迎合 | 紫電(6) |
| (2) 墨守 | 和光(7) |
| (3) 群吠 | 安車(8) |
| (4) 地獄 | 臥竜(9) |
| (5) 玉兔 | 乱臣(10) |

あふ・いっせん・きゅうとう
きんう・ぞくし・どうじん
ほうすう・ほりん・むけん
ゆうけん

問2

次の1～5の解説・意味にあてはまる四字熟語を後の□から選び、その傍線部分だけの読みをひらがなで記せ。

(10)
2×5

- 1 永遠の誓い。
- 2 後の祭り。
- 3 難民が溢れているさま。
- 4 万物がその所を得ている。
- 5 根本原因を取り除く。

亡羊補牢・推本溯源・釜底抽薪
河山帶礪・鳶飛魚躍・屋梁落月
哀鴻遍野・漆身吞炭

(八) 次の1～5の対義語、6～10の類義語を後の□の中から選び、漢字で記せ。
□の中の語は一度だけ使うこと。

(20)
2×10

対義語

類義語

- | | |
|------|-------|
| 1 快諾 | 6 繁栄 |
| 2 碇泊 | 7 行方 |
| 3 肥沃 | 8 次第 |
| 4 中枢 | 9 偵察 |
| 5 武断 | 10 敬老 |

きすう・こうぶ・しゅんきよ
しょうし・せつこう・てんまつ
ばつびょう・ぶんち・まつしょう
りゅうしょう

(九) 次の故事・成語・諺のカタカナの部分で漢字で記せ。

(20)
2×10

- 1 コチヨウの夢。
- 2 酒は天のビロク。
- 3 王侯シヨウシヨウ寧んぞ種あらんや。
- 4 カセイは虎よりも猛し。
- 5 朝菌はカイサクを知らず。
- 6 ヒゲも自慢のうち。
- 7 ジジヨの交わり。
- 8 セイアは以て海を語るべからず。
- 9 天はたかく地はひくくしてケンコン定まる。
- 10 シセイにして動かざる者は、未だ之有らざるなり。

(十) 文章中の傍線(1～5)のカタカナを漢字に直し、波線(ア～コ)の漢字の読みをひらがなで記せ。

(20)
2×5
1×10

A 名にし負う高雄の山の冬は寂びたるたそがれごろ、夕べの行の梵唄は寒巖枯木に声ありて語るがごとく嵐の青く渡れるところ雲の白う宿る辺りより落ち来りて、聴く人の骨に浸み脾肝に徹るばかり、心は洗洋として生死の境を脱れ出でて寂滅イラクの淨地に遊ぶの想いあらしむ。新月、今前山の巔に懸かりて神護寺の碧瓦を照らし、寺門に傍うて流れたる清滝川の三十六瀬雪を噴く。寺の庫裡、苔の香高き古庭を前にして竹の椽につづく出文机、青銅の花瓶に一輪活けたる山茶花の一葩、二葩、菊灯台の影淡きところに飄り落ちて聞くに声あらんとするまで静けき方丈の一閑室に、草座を敷いて兪迦三密の行に入れる老僧は問わずとも著き文覚上人、木蘭色の素絹の法衣に平五条のケサを掛け、白の葛の大口をハきたり。

(遅塚麗水「佐渡の文覚」より)

B 重裘を襲ね錦褥に坐し、暖炉を擁して庭前の雪を賞する者は、何ぞ坊間の小民が寒に泣き凍に叫ぶの状態を知らんや。身は都門数里の中を出でず、見る所は綺羅のみ、聞く所は管絃のみ。此くの如き者は何ぞ与に桑麻耕耨の事を談ず可けんや。古人が階前咫尺の地を以て千万里の遠きに喩うる者は蓋し之を以て也。而して其偶風を採り俗を察するの目的を以て地方を巡視することあるも、村吏之が前に導きて県官之が後に従う。故に見聞する所は土地の広狭山川の位置のみ。民間真成の現象の如きは毫も其の目前に呈露する能わざるなり。故に聡明敏慧の人と雖も実際の觀察を誤り、輿論に背くの事件を以て民情に従うの処置なりとシイし、自ら信じて疑わざるに至る、豈傍観者の一笑を免れんや。止身に係累なく笠を担い杖を曳き、飄然として四方に雲遊する者にして、始めて能く地方の利害キュウセキを知るを得べし。

(末広重恭「民情の如何を知れ」より)